

今月の題字
田澤 薫さん

(栃木県足利市)

昨年から大間々博物館の学芸員として活躍している田澤さんは平成2桁生まれの天真爛漫な現代っ子。若い感覚で町の歴史を後世に伝えて欲しいです。



足利屋休憩コーナーで『生きた証し展』開催

毎日新聞の六月五日群馬版と六月十九日栃木版に『生きた証し伝えたい』というタイトルで戦後八十一年の特集記事が掲載されました。その中で大きく紹介された写真が、大間々の「ながめ旅館」の庭で撮った特攻隊員と女学生たちの写真でした。



この写真は、桐原の茂木文子さんが「後世の人に見てもらいたい」という思いで足利屋に持ってきてくれたものでした。

文子さんはその後、に急逝され、八十歳の誕生日に届く予定だった『残したきもの』という文子さんの三冊目の歌集を見ることはありませんでした。文子さんの息子の茂木清さんが届けてくれた歌集の中に『特攻兵訪い来て写真撮りし日よ顔の揃いて皆少女なり』『開聞岳を幾度となく旋回し飛びて帰らぬ兵の数々』という歌なども収録されていました。

足利屋では、七月二日(木)から八月十六日(日)まで『生きた証し展』を開催いたします。この企画展では、茂木文子さんの写真や足利屋先代の松崎福司が遺した写真や資料を展示し、多くの方々に見ていただきたいと願っています。



ぺんぺん草の子②

る時、授業の中で生徒たちに星野富弘さんの『ぺんぺん草』の詩を紹介しました。「神様がたった一度だけこの腕を動かして下さるとしたら：星野富弘さんは何をしたかったと思う？」と生徒達に聞きました。生徒たちからいろいろな答えが出てくる中で、豊田聖（せい）君が「お母さんの肩を叩く」と言い当てたのです。『ぺんぺん草』の詩は、『神様がたった一度だけこの腕を動かして下さるとしたら母の肩をたたかせてもらおう 風に揺れるぺんぺん草の実を見ていたら そんな日が本当に来るような気がした』という詩です。「お母さんの肩をたたく」

世界一小さな
定利屋
トイレ美術館

今月の絵 《371》

大野勝彦さん『病気は心で直せ』



熊本県菊陽町に住む大野勝彦さんは、不慮の事故で両手を失ってしまいました。が、義手を使得って心に響く絵や言葉を書き続けています。『病気は心で直せ 笑ってなおせ 先祖に、そして自分にも感謝してなおせ』という言葉は、数多くの困難を笑顔と感謝で乗り越えてきた大野さんの経験から生まれた作品だと思っています。

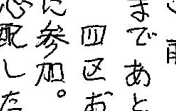
阿蘇山の麓の広大な敷地に「風の丘・阿蘇大野勝彦美術館」があり、毎日多くの人たちが大野さんに会いに来ています。用途に合わせて義手を使い分ける大野さんは「あの手この手で生きてます」と来場者を笑わせています。

靖ちゃん日記

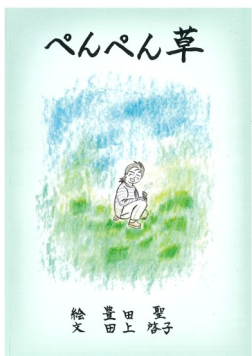
♡ やつちやんの似顔絵提供.. ひさかさん

令和8年6月20日(土) 雨

397 年目の大間々祇園祭まであと40日。今夜は今年初めて、四区お囃子保存会の太鼓の練習に参加。叩く順番を忘れてないか心配したが留の合図で手が自然に動き出した。大太鼓と鉦を聴きながら徐々にリズムが揃ってきた。四区のお囃子は、さんてこ、ざり、たま、にんば、おうま、まりん、神田囃子、稻荷囃子、昇殿、四丁目の10曲。孫の琉馬は今年6年生。親子3代で一緒に太鼓を叩けるのは今年が最後になるかもしれない。仲間の顔みれを見ると自分が最年長に近くなっているが大間々祇園40年の節目まで現役で太鼓を叩きたいと思っている。30歳年下の太鼓の先輩の懐ちゃんから「今日のやっちゃんの出来は90%」とほめられた。本番では若くてカワイイおネエちゃんたちの間に入り、華麗なバチさばきで100%の太鼓を見せたい。でも華麗ではなく、年齢なバチさばきになってしまいうのも知れない。



ぺんぺん草



ページの冊子の中には、虹の架橋で紹介できなかったたくさんの感動的なお話も収録されています。当時、中学一年生だった聖君が父親となり、娘さんと描いたぺんぺん草の絵は、この冊子の表紙や各ページのカットとして使われています。

『ぺんぺん草』の冊子をご希望の方は足利屋で差上げしています。（先着二十名）

ロな街灯や昔使っていたコンクリート製のゴミ箱などを発見して嬉しくなることがあります。時には通り抜けできず引返すこともあります。ですがそれも発見の一つです。この町に七十年以上住んでいます。が初めての路地に入ると、知らない町を歩いているような気分になります。『楽しみは七十過ぎて健康で散歩で誰かと話をする時』

虹の架橋ハニワ検索で、インターネットからでもご覧いただけます。

第三百七十二号は令和八年八月一日（土）発行予定です。